

富山市方言における終助詞「ヨ」

小西いずみ

日本方言研究会編 方言の研究 1 抜刷
発行 2015年9月30日

富山市方言における終助詞「ヨ」

小西いずみ

本稿では、富山市方言の終助詞ヨの用法を共通語のヨと対照しながら記述する。富山市方言のヨは、共通語と同じく、平叙文・疑問文・命令文にわたって使われる。〈当該情報を他の情報と照合して推論するよう求める〉ことを意味し、下降調ではその心的操作を〈強いる〉、上昇調では聞き手に〈任せる〉ことを表す点も共通する。共通語の質問文でヨを使うと、不満・非難の意を伴うが、富山市方言では伴わない。また、富山市方言の平叙文での下降調のヨは、名詞や準体助詞に直接付くか、チャ等の終助詞に後接するが、上昇調のヨは、共通語と同じく「Vヨ」「Nダヨ」等となる。下降調のヨの特徴は、名詞述語・のだ文でのコピュラの用法や、認識のモダリティを表す終助詞の発達に起因する。3つの文タイプを通じて、下降調のヨは、各文タイプ特有の終助詞と範列的に対立せず、上昇調のヨは、それらと同じ位置に現れ、対立関係にあると言える。

1. はじめに

富山市方言には次のような終助詞ヨがある。共通語のヨと基本的意味は共通しており、用法も重なる部分が多い。ただし、質問文で下降調のヨ（以下「ヨ↓」）を聞き手への不満・非難の意を伴わずに用いる点、平叙文の名詞述語・のだ文の非過去形において、ヨ↓はコピュラを伴わず、上昇調のヨ（以下「ヨ↑」）はコピュラを伴う点など、共通語とは異なる特徴が見られる¹。

- (1) コレカラ ドコ イクヨ↓。
 （これからどこに行く？）
- (2) A マリチャンチャ ドコノ 出身ケ。
 （まりちゃんってどこの出身？）
 B 富山 {ヨ↓／*ヨ↑／ダヨ↑／*ダヨ↓}。
 （富山 {だよ↓／だよ↑}。）
- (3) A アレ、ドコ イクガ。
 （あれ、どこに行くの？）
 B コドモ 迎エニ 行ク {ガヨ↓／*ガダヨ↓}。
 （子供を迎えに行くんだよ↓。）

本稿ではこのヨの用法を共通語と対照しながら記述する。記述は、筆者自身の内省、および、他の富山市方言話者を対象とした調査の結果にもとづく²。

2. 先行研究

2.1 共通語のヨの意味・機能

共通語のヨの基本的意味・機能については、益岡隆志（1991）・白川博之（1992, 1993）など、聞き手に対する伝達態度に置く立場、蓮沼昭子（1996, 1997）・田窪行則（2010）など、心的操作の標示とみなす立場に大別される。

ヨが独話で用いる点を考慮すると、後者の立場のほうがヨの意味を適切に捉えていると思われる。

蓮沼昭子(1996, 1997)は、さまざまな文タイプに共通するヨの基本的機能を「文脈に認識上の何らかのギャップの存在を表示するとともに、そうした状況における認識能力の発動、あるいは認識形成に対する指令を表す」とし、平叙文・疑問文などの文のタイプに応じて記述した。また、田窪行則(2010)は、ヨは基本的には「情報を間接知識領域に記載せよ」という指示であるとし、さらに、関与性の原則により「これをいま関与的な知識状態に付け加えたのち、適当な推論を行え」という指示もでてくるとする。

井上優(1997)は、平叙文の「Pよ↓」は、「話し手と聞き手を取りまいている状況を「Pということが真になるという、そういう状況である」という線でもとらえなおすよう強制すること」、「Pよ↑」は、「話し手と聞き手を取りまいている状況は、Pということが真になるという、そういう状況である」ということを聞き手に示して、「このような状況の中でどうするか」という問題をなげかけること」を表すとする。ヨ自体の意味は明示しないが、蓮沼や田窪と同様に心的操作標示を基本義とし、下降調はその操作を「強制する」、上昇調はその操作を聞き手に「なげかける」ことを表すと捉えているのだろう。

富山市方言のヨも、語自体の意味としては共通語と同じく、〈当該情報を文脈や知識上の関連情報と照合し、推論を行うよう指示する〉ものと捉えられるが、特定の文タイプや文脈のなかで、共通語とは異なる特徴を見せる。その具体的な異同を記述するとともに、その相違が何によって決まるのか、他の終助詞とどのような関係にあるのかを考察するのが本稿の目的である。

2.2 富山県井波方言のイ・ヨ

井上優(2006a, 2006b)は、富山県井波方言のさまざまな終助詞、および、「のだ」相当表現について記述するなかで、終助詞ヨ・イに触れている。

まず、ヨは、疑問詞、名詞、ガヤ(のだ)などに付いて聞き手に説明する(説明を求める)意味を強めるもので、「ガヤ」につく場合は「ヤ」が削除されて「ガヨ」となる」とする。また、イおよびイネは、疑問詞、形式名詞が、

ガヤ(のだ)に付くほか、終助詞ガ・ワ等にも付き、「ヨ」と同様、聞き手に説明する(説明を求める)意味を強める」とする(井上優 2006b: 145-146)。

また、井上は井波方言の「のだ」相当表現には、形式名詞(準体助詞)ガに判定詞(コピュラ)ヤが付いたガヤと、同じガに終助詞イが付いたガイ(ゲー)があり、聞き手に実情を説明する「実情説明」にはガイ、実情を理解したという話し手の認識変化を表す「実情理解」にはガヤが使われるとする。

(4) a. チョッコ 飲ミニ イカンケ?

(ちょっと飲みに行かない?)

b. ソンガ、今日 アンマ 時間 ナイ {ガイ/*ガヤ}。

(それが、今日はあまり時間がないんだよ。) (井上優 2006b: 149)

(5) ア、アンタ ココ オッタ {ガヤ/*ガイ}。

(あ、あなた、ここにいたんだ。) (井上優 2006b: 150)

井上は、終助詞イを、ヨの母音が脱落した形とみなしているようだ。終助詞ヨに関しては、井上の記述する井波方言と富山市方言とで一致するが、終助詞イは、富山市方言では、終助詞ガヤワと複合してガイ・ワイの形で現れるものの、疑問詞や準体助詞ガに続くことはない。県西部の井波方言のほうが、東部の富山市方言より、ヨからイへの変化を進めていると推測される。なお、井上が、井波方言のヨ・イと共通語のヨの関係をどう捉えているのかは不明である。

3. ヨの音調

【表1】に、動詞・形容詞の基本形、名詞(+コピュラ)、動詞+準体助詞ガ(+コピュラ)³、動詞基本形+終助詞チャが、アクセント句頭に述語として用いられた場合における、ヨなし、+ヨ↓、+ヨ↑の音調を記す。

【表1】ヨの音調

～。	+ヨ↓	+ヨ↑
[カ]ク。	[カ]クヨ]]. [カ]クヨ。	[カ]ク[ヨ。
タ[カ]イ。	タ[カ]イヨ]]. タ[カ]イヨ。	タ[カ]イ[ヨ。
コ[ドモダ]。	(欠)	コ[ドモダ]][ヨ。
コ[ドモ]。	a. コドモ]ヨ]]. コ[ドモ]ヨ。 b. コ[ドモヨ]].	(欠)
ス[リ]ッパ。	ス[リ]ッパヨ]]. ス[リ]ッパヨ。	(欠)
カ[クガ]ダ。	(欠)	カ[クガ]ダ[ヨ。
カ[クガ]。	カ[クガ]ヨ]]. カ[クガ]ヨ。	カ[クガ]][ヨ。
カ[クチャ]。]	カ[クチャ]ヨ]]. カ[クチャ]ヨ。	(欠)

(欠) 該当形が不適格, [ピッチの上昇位置,] 下降位置
[[直後の拍の拍内上昇,]] 直前の拍の拍内下降

富山市方言は、共通語と同様、下げ核の有無と位置を弁別的特徴とするアクセント体系を持つ。動詞「書ク」のアクセントは1=-2型(1拍め=末尾から2拍めに核)、形容詞「高イ」は2=-2型、名詞「コドモ」は0型(無核)、準体助詞ガとコピュラ「ダ」は1型である。「書ク」を含むほとんどの2拍動詞・2拍形容詞は、終止形では1=-2型、連体形や一部の終助詞が後接する環境では0型となる。【表1】の～ガ(ダ)、～チャもこれに該当する。

表1の+ヨ↓の欄には、ヨ自体が積極的に下降する音調とそうでない音調とを併記したが、両者の現れる環境は同じである。ただし「コドモ」のように0型名詞にヨが付くとき、低く付く音調(表のa)と、高いまま平らに付いて下降する音調(b)があり、両者は現れる環境が異なる(後述)。

名詞述語ではコピュラの有無と音調との関係が相補的で、コピュラ付加形はヨ↑、名詞単独形はヨ↓が適格である。の(だ)相当形も名詞述語に似て「ガダヨ↑」「ガヨ↓」が自然だが、「ガヨ↑」もありうる点が異なる。

4. ヨの用法

富山市方言のヨは、共通語と同じように汎用的で、平叙文・疑問文・命令文にわたって用いられる。「カコー（書こう）」など意志形による意志文には現れない。以下では、疑問文・平叙文・命令文の順に記述する。

4.1 疑問文

疑問文ではヨ↓のみでヨ↑は現れない。また、ヨは述語の断定形（ムードにおける無標形）⁴のみに付き、推量形には付かない。

(6)～(9)に疑問語疑問文の例を示す。(6)(7)が動詞・形容詞の非のだ文、(8)が名詞述語文、(9)が動詞の「のだ」文で、各例のaがヨのない文、bがヨを伴う文である。疑問語疑問文の基本的な述語形式は、aのように、断定形単独（下降調または上昇調）、または、「断定形+終助詞カ・ケ」（下降調）であり、各々にヨ↓を付加しうる。名詞述語・のだ文の非過去形では、コンピュータを伴わない「N（カ・ケ）。」「ガ（カ・ケ）。」がふつうで、各々にヨ↓を付加しうる。0型名詞にヨ↓が付く場合、(表1)のa・b両方の音調が可能である。「Nダ。」「ガダ。」は自問として許容しうるが「Nダヨ↓。」「ガダヨ↓。」は質問（問いかけ）か自問かによらず不適格である。

(6) a. コレカラ ドコ イク { ϕ /カ/ケ}。

(これからどこに行く?)⁵

b. コレカラ ドコ イク {ヨ↓/カヨ↓/ケヨ↓}。 = (1)

(7) a. 赤イガト 青イガ ドッチ イー { ϕ /カ/ケ}。

(赤いのと青いの、どっちがいい?)

b. 赤イガト 青イガ ドッチ イー {ヨ↓/カヨ↓/ケヨ↓}。

(8) a. カ ダレ { ϕ /ダ/カ/ケ}。

(これは誰?)

b. カ ダレ {ヨ↓/*ダヨ↓/カヨ↓/ケヨ↓}。

(9) a. 今年ノ 旅行 ドコ イク {ガ/ガダ/ガカ/ガケ}。

(今年の旅行はどこに行くの?)

- b. 今年ノ 旅行 ドコ イク {ガヨ↓ / * ガダヨ↓ / ガカヨ↓ /
ガケヨ↓}。

真偽疑問文の例を(10)～(13)に示す。基本的な述語形式は、疑問語疑問文と同じで、断定形単独(顕著な下降調, または上昇調)か「断定形+カ・ケ」(下降調)だが、「断定形+ヨ↓」は不適格で、カ・ケの後にのみ付く。

- (10) a. アンタモ イク {φ / カ / ケ}。
(あなたも行く?)
b. アンタモ イク {*ヨ↓ / カヨ↓ / ケヨ↓}。
- (11) a. 赤イガデ イー {φ / カ / ケ}。
(赤いのでいい?)
b. 赤イガデ イー {*ヨ↓ / カヨ↓ / ケヨ↓}。
- (12) a. カ マリチャン {φ / *ダ / カ / ケ}。
(これは, まりちゃん?)
b. カ マリチャン {*ヨ↓ / *ダヨ↓ / カヨ↓ / ケヨ↓}。
- (13) a. 今年モ 京都 イク {ガ / *ガダ / ガカ / ガケ}。
(今年も京都に行くの?)
b. 今年モ 京都 イク {*ガヨ↓ / *ガダヨ↓ / ガカヨ↓ /
ガケヨ↓}。

(6)～(13)で適格とした形は、質問にも自問にも用いるが、aの場合、「断定形↑」と「断定形+ケ」が待遇的に中立で質問に用いやすく、「断定形↓」「断定形+カ」はぞんざいで自問に用いやすい。また、下降が顕著なほどぞんざいに感じられる。ヨ↓は下降調と似て、ぞんざいで自問に用いやすく、質問の場合は〈回答をせまる〉という意味合いを伴いやすい。そのため、次のような詰問や反語文でも用いられやすい。なお、「断定形↓」「断定形+カ」と「断定形+ケ」との違いに対応して、「断定形+ヨ↓」「断定形+カヨ↓」よりも「断定形+ケヨ↓」のほうがぞんざいさがやわらぐ。

- (14) コイ 時間ニ ドコ イク {ガ↓/ガヨ↓}。
 (こんな時間はどこに行く {んだ/んだよ↓}。)
- (15) コイ マズイモン 誰 食ベル {φ↓/ヨ↓/ガ↓/ガヨ↓}。
 (こんなまずい物を誰が食べる {φ/よ↓/んだ/んだよ↓}。)⁶
- (16) コイ マズイモン マリチャン 食ベル {カヨ↓/ケヨ↓}。
 (こんなまずい物をまりちゃんが食べるかよ。)

共通語のヨ↓は、質問での使用には制限があるとされる。白川博之 (1993) は、カ疑問文には、(a)「あれ、もう8時か↓」などの独り言的な疑念の表明、(b)「おい、あいつ、大丈夫か(↓)」などの聞き手めあての疑念の表明、(c)「細かい金、持ってるか↑」などの聞き手に対する質疑・応答要求があり、(a) (b) ではカをカヨに置換可能だが、(c) では不可とする。また、蓮沼昭子 (1997) は、上の (14) ~ (16) と同種の文をあげ、問いかけ文にヨ↓を伴うと不可避免的に「不満」「非難」「苛立ち」「あなどり」といった、聞き手に対する話し手の否定的評価を伴う発話となるとする。そして、問いかけにおけるヨの意味を「聞き手に通常理解力・判断能力が欠落していることに対する話し手の不満の表明と正しい認識形成の要請」(p. 593, 表1) とする。

富山市方言のヨ↓は、詰問・反語解釈もとりうるが、「不満」等の意味が不可避ではなく、(6) ~ (13) のような、聞き手に回答を求める通常の質問文でも用いる。ただし、上述のとおり、ヨ↓を伴う疑問文はいずれもぞんざいさを伴う。ヨ↓は〈当該情報を関連情報と照合し、推論することを強いる〉という意味を持つが、この心的操作を強制するという意味特性が、詰問などの含意やぞんざいさという待遇特徴を導くと言える⁷。

なお、先行研究では管見の限り言及・記述がないが、「共通語」と呼びうる日本語変種(話者の地域的属性を喚起しない変種)においても、そのもっとも通俗的でくだけた発話スタイルでは、下のような疑問語疑問文でのヨ↓が可能だと思われる。このヨ↓は、断定形に(しかも名詞・「の」に直接)付く点でもぞんざいさを伴う点でも、富山市方言のヨ↓に通じる性格を持つ。

- (17) これからどこに行くよ↓。

(18) あいつ、誰よ↓。

(19) 今年の旅行、どこに行くのよ↓。

4.2 平叙文

平叙文ではヨ↓・ヨ↑ともに用いられ、また、ヨの後に終助詞ノ・ネが続くこともある。以下、順に見ていく。

4.2.1 ヨ↓

平叙文でヨ↓を付加しうる述語形式は、次のものに限られる⁸。

(A) 名詞単独 例) コドモヨ↓。

(B) のだ文における準体助詞単独形 例) カクガヨ↓。

(C) 断定形+終助詞ト・チャ・ワ・ワイネ・ガイネ・トイネ
例) カクチャヨ↓。

(D) 推量形+終助詞ガイネ・ゲ 例) カコーガイネヨ↓。

「*コドモダヨ↓。」「*カクヨ↓。」など (A) (B) 以外の断定形にヨ↓が付かず、(C) のように他の終助詞に後接する点で、共通語とは大きく異なる。

(A) (B) の例をあげる。各例 a がヨのない文、b がヨを伴う文である。0 型名詞にヨ↓が付く場合、疑問文とは異なり、【表 1】の b の音調（平らにヨが続いて下降）をとり、a の音調（ヨが低く付く）は不自然である。

(20) A マリチャンチャ ドコノ 出身ケ。

(まりちゃんってどこの出身?)

B a. 富山 {φ/*ダ}。

(富山 {φ/?だ}。)

b. 富山 {ヨ↓/*ダヨ↓}。

(富山だよ↓。) = (2)

(21) A アレ、ドコ イクガ。

(あれ、どこに行くの?)

B a. コドモ 迎エニ イク {ガ／*ガダ}。

(子どもを迎えに行く {の／んだ}。)

b. コドモ 迎エニ イク {ガヨ↓/*ガダヨ↓}。

(子どもを迎えに行くんだよ。)= (3)

(22) a. コナイダ 京都 イッテキタ {ガ／*ガダ}。ホシトラ…

(この間、京都に行ってきた {の／んだ}。そうしたら…)

b. コナイダ 京都 イッテキタ {ガヨ↓/*ガダヨ↓}。ホシトラ…

(この間、京都に行ってきたんだよ。そうしたら…)

これらは話し手にとって既知の情報を述べる文である。富山市方言では、このような文で「N。」「ガ。」が適格、「Nダ。」「ガダ。」は不適格で、ヨ↓は前者に任意の要素として付く。共通語では「N。」「ノ。」の現れる文脈は富山市方言の「N。」「ガ。」と対応するが、コンピュータ付加形、特にのだ文の「ンダ。」の用法が広い。また、共通語ではヨ↓を付した形として「Nダヨ。」「ンダヨ。」が一般的で、「Nヨ。」「ノヨ。」は女性性を帯びる。一方、aとbの意味関係は富山市方言と共通語とで共通する。「N。」「ガ・ノ。」が既知の情報を中立的な態度で示すのに対し、ヨ↓付加形は情報の再検索など何らかの心的操作を求めるものとなる。例えば(20)(21)のヨ↓形は「あなたも知っているはずだ」とか、「実は…」と事情を説明して理解を求めるといった含意が伴う。(22)のような語りの発話でヨ↓が付くと、「実は…」「なんと…」と、重大そうに事柄を伝え、当該事態の意味やその後の展開について推論を促す効果を持つ。

名詞述語・のだ文であっても、(23)(24)のように、発話時に得た新たな認識を述べる文(井上優2006a, 2006bの「実情理解」の文)では、富山市方言・共通語ともに「～ダ。」が適格となる。また、「N。」「ガ・ノ。」は(23)のように、話し手がその事態を受けとめつつある文(森山卓郎1992の「情報受容型疑問文」)では許されるが、(24)のように話し手がその事態を確信したことを表す文では不適格となる。共通語は、(24)では独白で「Nダヨ↓」が可能だが、富山市方言では「Nヨ↓」「Nダヨ↓」ともに不適格で、終助詞を使うなら「Nダジャ」となる(ジャについては後述)。

- (23) へー, ソイ 変ワッタ 人モ オン {ガ/ガダ/*ガヨ↓/
*ガダヨ↓}。
(へえ, そんな変わった人もいる {の/んだ/*んだよ↓}。)
- (24) アレ, ダレカ オモトラ 隣ノ コドモ {*φ/ダ/*ヨ↓/
*ダヨ↓/ダジャ}。
(あれ, 誰かと思ったら隣の子ども {*φ/だ/だよ↓}。)

富山市方言では (A) (B) 以外の断定形にヨ↓が付かず、当該情報に対する話し手の認識に応じてチャなど他の終助詞が使われる。これら「断定形+終助詞」の一部にさらにヨ↓が付きうる。上で (C) としたものに当たる。例を示す。

- (25) a. マリチャン 今カラ 来ル {φ/ト}。
(まりちゃん, 今から来る {φ/って}。)
- b. マリチャン 今カラ 来ル {*ヨ↓/トヨ↓}。
(まりちゃん, 今から来る {よ↓/ってよ↑/?ってよ↓}。)
- (26) a. コッチノ ホーガ イー {φ/チャ/ワ/ジャ/ゼ}。
b. コッチノ ホーガ イー {*ヨ↓/チャヨ↓/ワヨ↓/
*ジャヨ↓/*ゼヨ↓}。
(こっちのほうがいい {φ/よ↓}。)⁹

(25) の終助詞トは共通語のツテにあたり、〈当該情報が伝聞にもとづく〉ことを表す。共通語では「ツテヨ↓」より「ツテヨ↑」が自然だが、富山市方言では「トヨ↓」が自然である。(26) のチャ・ワ・ジャ・ゼは、平叙文専用の終助詞で、それぞれ次の意味を持つ (井上優 1995a, 1995b, 1998, 2006b¹⁰)。

- チャ：当該の情報が〈既定事項〉, すなわち〈話し手の認識をこえて無条件に真であるとしてよい〉と判断される情報であることを表す。
- ワ：当該の情報が〈その場で認識された話し手の個人的見解〉, すなわち〈話し手の認識世界においては真である〉として新規に認識

された情報であることを表す。

ジャ：〈非主体的な認識更新〉すなわち〈現場の状況や記憶を参照した結果、話し手のそれまでの認識の更新をせまるような結論がその場で自然と意識にのぼり、話し手がその結論に沿って認識を更新する必要性を感じている〉ことを表す。

ゼ：〈当該の情報と別の情報との間の矛盾・摩擦を発話時において認識している〉ことを表す。

(26b) に示すように、チャ・ワにはヨ↓を付けうるが、ジャ・ゼはヨ↓を含め他の終助詞の後接を許さず、必ず文末で用いられる。(26a)「チャ。」「ワ。」に対して、(26b)「チャヨ↓。」「ワヨ↓。」は、聞き手が話し手とは異なる認識を持つと想定した文脈で用いられ、その判断を他の情報と照合するよう求める意味が加わる。次の(27a)で「チャヨ↓。」が不自然なのに対し、(27b)のように聞き手に自らの言動への反省を求める文脈ならば「チャヨ↓。」が自然になる。

(27) a. ナラ オラ ソロソロ 帰ル {チャ／??チャヨ↓}。

(じゃあ、私はそろそろ帰るよ↓。)

b. ソイコト ユーガナラ オラ モー 帰ル {チャ／チャヨ↓}。

(そんなことを言うなら、私はもう帰るよ↓。)

(C) の場合、名詞述語やのだ文では、(28) のように、コピュラ付加形が使われる。なお、(28a) で「ガダワ。」が適格なのに対し、(28b) で「ガダワヨ↓。」が容認しにくいのは、真偽を客観的事実として明らかにしうる命題に対する〈話し手の個人的見解〉(ワの意味) について、〈他の情報と照合して推論を強いる〉(ヨ↓の意味) ということが成立しにくいからだと思われる。

(28) A マリチャンチ キンノカラ マックラナガ。

(まりちゃんち、昨日から真っ暗なんだ。)

- B a. 旅行デモ イッタ {ガダチャ／ガダワ}。
 b. 旅行デモ イッタ {ガダチャヨ↓／??ガダワヨ↓}。
 (旅行にでも行ったんだよ↓。)

(C) の終助詞には他にガイネ・ワイネ・トイネがある。例は (26)', (26)". また「推量形+ガイネ・ゲ」にもヨ↓が後接する。上で (D) としたものにあたる。例は (29)。トイネは上述の伝聞のトに終助詞イネが付いた複合形、ワイネ・ガイネはワ・ガ+イネが一語化したもの、ゲはガ+イが一語化したものと思われる。イネ・ガイネ・ワイネ・ゲは、それ自体がヨに似、当該情報と他の情報との照合・推論を求める意味を持つ。ヨ↓の付加で強制性が強まる。

- (26)' a. コッチノ ホーガ イー {ガイネ／ワイネ}。
 b. コッチノ ホーガ イー {ガイネヨ↓／ワイネヨ↓}。
 (こっちのほうがいいよ↓。)
- (26)" a. コッチノ ホーガ イートイネ。
 b. コッチノ ホーガ イートイネヨ↓。
 (こっちのほうがいい {ってよ↑／?ってよ↓}。)
- (29) a. マリチャンモ イコー {ガイネ／ゲ}。
 b. マリチャンモ イコー {ガイネヨ↓／ゲヨ↓}。
 (まりちゃんも行くだろうよ↓。)

以上の例を通してみると、(A) 名詞単独や (B) ガ単独形に付くヨ↓は、話し手にとって既知の情報を述べる文で使われ、〈当該情報を他の情報と照合し、推論することを強いる〉という意味を付加する性質を持つ。(A) 名詞単独・(B) ガ単独形という前接語の制限は、〈話し手の知識の叙述〉という文の意味的特性が統語的に顕現したものと言える。一方、(C) 「断定形+終助詞チャ等」、(D) 「推量形+終助詞ガイネ等」に付くヨ↓は、発話時に形成した認識や判断を述べる文で使われる。富山市方言では、このような文で「断定形・推量形+ヨ↓」が許されず、他の終助詞を介する点で、共通語と大きく異なる。

井上優 (1995b, 2006b) の記述は、共通語でヨ↓が担う意味を井波方言ではチャ・ワが分担していると捉えているようにも読めるが、本稿ではそのようにはみなさない。上の意味規定からうかがえるように、チャ・ワが表すのは、当該事態に対する発話時の話し手の捉え方であり、認識のモダリティに属するものと言える。一方、ヨが表すのは、情報の照合と推論という心的操作の指示である。この点については5節で改めて触れる。

4.2.2 ヨ↑

ヨ↑は、ヨ↓と違い、断定形に直接付く。使用文脈も共通語の「断定形+ヨ↑」に対応し、(30) (31) のような、聞き手が気づいていない情報を伝えて注意を促す場合や、(32) ~ (34) のような聞き手が知らない情報を伝える場合である。(31) (33) (34) のように名詞述語・のだ形ではコンピュータにヨ↑が付き、「Nヨ↑」は不適格、「ガヨ↑」は可能だが、「ガダヨ↑」のほうが自然である。

- (30) ア、車 来ルヨ↑。
(あ、車が来るよ↑。)
- (31) アレ、モー 5時 {*ヨ↑/ダヨ↑}。
(あれ、もう5時だよ↑。)
- (32) A 何時ニ ウチ 出ルガ。
(何時にうちを出るの?)
B モー 出ルヨ↑。
(もう、出るよ↑。)
- (33) A マリチャンチャ ドコノ 出身ケ。
(まりちゃんってどこの出身?)
B 富山 {*ヨ↑/ダヨ↑}。
(富山だよ↑。) = (2)
- (34) ココ 危ナイ {ガヨ↑/ガダヨ↑}。
(ここは危ないんだよ↑。)

これらのヨ↑は、当該情報を他の情報と照合し、推論する必要性を聞き手に「なげかける」(井上優1997)。ヨ↓が情報の照合・推論を〈強いる〉のに対し、ヨ↑は対処を聞き手に〈任せる〉という意味を持つと言える。

平叙文で上昇調が自然な終助詞としてほかに4.2.1でも触れたゼがある。上のうち(33)以外はヨ↑をゼ↑に換えることが可能である。ただし、ゼ↑は聞き手を必要とせず、話し手自身の認識を述べる発話となりうるのに対し、ヨ↑は聞き手にその情報を伝え、処理を〈任せる〉という解釈が優先される。

なお、ヨ↑はヨ↑↓(上昇下降調)に置換しうる。ヨ↑↓は、聞き手に問題提起し、さらに〈対処をせまる〉意を伴う¹¹。(35)では、ヨ↓よりダヨ↑↓のほうが、当該情報を認識していないことを非難し、対処を求める(例えば「まりちゃんも行くことを考慮して計画を練り直せ」)含意が感じられる。

(35) A ワタシラ フタリデ イクガダロ↑。

(私達二人で行くんだろ?)

B ナーン、マリチャンモ イクガ {ヨ↓/ダヨ↑/ダヨ↑↓}。

(いや、まりちゃんも行くんだ {よ↓/よ↑/よ↑↓}。)

4.2.3 ヨ+ノ・ネ

「断定形+ヨ」および「断定形+終助詞チャ・ワ+ヨ」には、終助詞ノ・ネが後接しうる。ノ・ネ部分が上昇下降調↑↓をとるのが自然で、共通語のヨネに一般的な上昇調はとりにくい。意味は共通語の「ヨネ↑」同様、話し手が事態成立を見込んだうえで同意を求めることを表す。名詞述語・のだ文の非過去形では、コピュラを伴い、「Nヨ {ノ・ネ}」「ガヨ {ノ・ネ}」は許容しにくい。

(36) ココニ アル {ヨノ↑↓/チャヨノ↑↓}。

(ここにあるよね?)

(37) カ マリチャン {?ヨノ↑↓/ダヨノ↑↓}。

((写真を指して) これはまりちゃんだよね?)

4.3 命令文

命令文を作る専用の述語形式として①「カケ」「ミー（見ろ）」「カクナ」等の命令・禁止形，②「カカレ」「カカレンナ」等の尊敬辞 -(r)are-ru を伴う命令・禁止形，③「カイト」等の依頼形がある。①はきわめてぞんざいで，②のほうが待遇的に標準の行為指示形と言える。これらに後続する終助詞としてマ・ヤがあり，マは(38)のような期待・想定に反した状況で修正を求める場合，ヤは(39)のような「念押し」に使われる¹²。ヨ↓はマに，ヨ↑はヤに準じた文脈で用いられる。各例 a がヨのない文，b がヨを付けた文。

(38) グズグズシトラント ハヨ

(ぐずぐずしていないで早く)

1a. イケ { * φ / マ }。

b. イケ { ?? ヨ ↓ / マヨ ↓ }。

(行け { φ / よ ↓ }。)

2a. イカレ { φ / マ }。

b. イカレ { ヨ ↓ / マヨ ↓ }。

(行きなさい { φ / よ ↓ }。)

3a. イッテ { ? φ / マ }。

b. イッテ { ? ヨ ↓ / マヨ ↓ }。

(行って { φ / よ }。)

(39) アシタ ワスレント

(明日忘れずに)

1a. イケ { * φ / ヤ }。

b. イケ { ?? ヨ ↑ / * ヤヨ ↑ }。

(行け { ?? φ ↑ / よ ↑ }。)

2a. イカレ { φ / ヤ }。

b. イカレ { ヨ ↑ / * ヤヨ ↑ }。

(行きなさい { φ / よ ↑ }。)

3a. イッテ { ? φ / ヤ }。

b. イッテ { ? ヨ ↑ / * ヤヨ ↑ }。

(行って { ϕ / よ ↑}。)

①の単純命令形はマ・ヤの付加が義務的で、動詞単独は不適格、ヨの付加も不自然（共通語的）に感じられる。③テも単独・ヨ付加がやや落ち着かない。しかし②の尊敬命令形は、動詞単独もヨ付加も自然に感じられる。また、マにはヨ↓を後接しうるが、ヤにはヨ（ヨ↑・ヨ↓ともに）を後接しえない。すなわち、ヨ↓は②尊敬命令形単独とともに「命令形+マ」にも付くのに対し、ヨ↑は②尊敬命令形単独にしか付かない。

なお、派生的な命令表現でもヨが現れる。否定疑問形「～ンカ」は、(40)のように修正指示の命令表現で使われ、尊敬辞を伴う「～（ラ）レンカ」もある。終助詞マ付加は不適格で、単純否定疑問「～ンカ」はヨ↓を付けたほうが自然、尊敬否定疑問「～（ラ）レンカ」にはヨ↓が任意に付く。(41)のような不可能形の禁止表現は、平叙文の「断定形+ヨ↑」に準じてヨ↑が任意に付き、「念押し」になる。また、(42)のような、「非過去断定形+形式名詞コト+ヨ↓」の形で〈勧め〉を表す形がある。共通語の「非過去断定形+ことだ」に似るが、「～コトヨ↓」の形でしか用いられず、平叙文の「Nヨ↓」の用法から複合辞化したものと言える。

(40) グズグズシトラント ハヨ

(ぐずぐずしていないで早く)

a. {?? イカンカ / イカレンカ}。

(行かないか。)

b. {イカンカヨ↓ / イカレンカヨ↓}。

(?行かないかよ↓。)

(41) アコ 危ナイカラ イカレン { ϕ / よ ↑}。

(あそこは危ないから行ってはいけない { ϕ / よ ↑}。)

(42) 迷トンガナラ マズ ヤッテミルコトヨ↓。

(迷っているのなら、まずやってみることだ。)

また、勧誘文にもヨ↓が現れる。勧誘文の述語形式として、①「～ンマイ

(カ・ケ)], ②否定疑問形「～ン(カ・ケ)], ③「カコー」などの意志形がある。①はマイ単独にも、カ・ケの後にもヨ↓が付きうる。②では真偽疑問文の場合に準じ、カ・ケの後にものみヨ↓が付きうる。③にもヨ↓が付きうるが、共通語的でやや落ち着かない。

(43) ハヨ イカンマイ {ヨ↓/カヨ↓/ケヨ↓}。

(早く行こうじゃないか。)

(44) 一緒ニ イカン {*ヨ/カヨ↓/ケヨ↓}。

(一緒に行かないか。)

(45) ハヨ イコー {φ/?ヨ↓}。

(早く行こう {φ/よ↓}。)

5. 考察——共通語のヨとの異同、他の終助詞との関係——

前節で見てきたように、富山市方言のヨは、平叙文・疑問文・命令文での用法において共通語とは異なる特徴を見せる。しかし、ヨが語として持つ意味は、共通語と同様〈当該情報を他の情報と照合し、推論するよう求める〉と規定でき、下降調ではその心的操作を〈強いる〉、上昇調では聞き手に〈任せる〉という意味が加わる点も共通語と同じである。すなわち、富山市方言のヨと共通語のヨは、終助詞自体の意味も、文末イントネーションが担う意味も同じだが、さまざまな文のタイプや発話文脈においてどのように用いられるかが異なる。こうした異同をどのように理解すべきだろうか。

疑問文における富山市方言のヨ↓は、聞き手に対する不満・非難等の否定的評価を伴わずに質問として用いる点で共通語と異なる。ヨの〈情報を照合し、推論するよう求める〉という意味は、情報に不定要素があることを表明し、それを埋めることを求めるという、疑問文、特にその典型的なタイプである質問文の本質的な特徴に整合する。この観点に立てば、富山市方言のヨは、その語義から導かれる自然な用法を呈しており、むしろ共通語のヨの

ほうが特殊な用法制限を持つように見える。共通語では、下降調のヨが持つ〈心的操作を強制する〉という意味が、中立的な態度での質問としては待遇的に不適切だとして避けられ、不満・非難等の意味が文意として焼き付いたのだと思われる。つまり、共通語の疑問文におけるヨの用法制限は、語用論的な動機に由来すると言える。

平叙文では、特に下降調のヨのふるまいの相違が大きく、共通語の「断定形・推量形+ヨ↓」が、富山市方言では「Nヨ↓」「ガヨ↓」と「断定形・推量形+終助詞+ヨ↓」に分かれる。これは、名詞述語・のだ文におけるコンピュータのふるまい、および、断定形に付いて認識的モダリティを表す終助詞の有無という、ヨ自体とは異なる面での相違が、述語構造におけるヨの位置の相違として顕現したとみなせる。4.2.1で見たように、富山市方言では「N。」「ガ。」と「Nダ。」「ガダ。」とが対立しており、前者が可能な文脈で付加的にヨ↓が付いて「Nヨ↓。」「ガヨ↓。」となる。一方、共通語ではコンピュータ付加形、特にのだ文での「Nダ。」の用法が広く、また、ヨ↓を付した形として「Nダヨ。」「Nダヨ。」が一般的で、「Nヨ。」「ノヨ。」は女性性を帯びる。

また、富山市方言では、平叙文の断定形に付いて認識的モダリティを表し分けるチャ・ワ等の終助詞が発達している。ヨ↓はその「断定形+終助詞」に任意に付加されるものである。これは共通語において断定形にヨ↓が任意に付加されるのと並行的だと捉えられる。4.2.1でも触れたように、井上優(1995b, 2006b)の記述は、共通語のヨが多義的に表している意味を、井波方言のチャやワが表し分けているとみなしているように読めるが、少なくとも富山市方言では、そのような捉え方は適切ではない。チャ・ワ等が断定形に付くのに対して、ヨ↓はそれが許されず、チャ・ワ等の後に付くという述語構造に照らせば、共通語にはチャやワに対応する要素はなく、共通語のヨ↓と富山市方言のヨ↓が対応しているとみなしうる¹³。

一方、平叙文のヨ↑は、共通語と同様に「カクヨ↑」など断定形に付き、チャ等の終助詞を介することはない。また名詞述語・のだ文では「*Nヨ↑」「*ガヨ↑」は不適格で、「Nダヨ↑」「ガダヨ↑」とコンピュータ付加形に付く。

命令文での終助詞マ・ヤとヨ↓・ヨ↑にも、似たことが言える。終助詞マ・

ヤは、当該の行為指示と発話文脈との関係を表し分ける形式であるのに対し、ヨに伴う下降・上昇イントネーションは、本来的には当該の行為指示を〈強い〉か〈任せる〉かを表すだけで、発話文脈においてマ・ヤの意味に近似するのだと思われる。また、ヨ↓は尊敬命令形にも「命令形+マ」にも付くが、ヨ↑は尊敬命令形にしか付かず、「命令形+ヤ」には付かない。

ヨ↓とヨ↑については、疑問文も含めて次のように言える。すなわち、ヨ↓は、チャ・ワ等（平叙文）、カ・ケ（疑問文）、マ（命令文）といった特定の文タイプに現れる終助詞と対立せず、それらに後接するか、平叙文ではチャ・ワ等が現れない名詞・ガの直後に現れる。一方、ヨ↑は、平叙文の終助詞ゼ・ジャや命令文のヤと同じ位置に現れ、範列的な対立関係にある。

6. 発展的課題

本稿では、富山市方言の終助詞ヨが、共通語のヨと意味を共有しながら、具体的な用法としてどのように異なるかを記述し、その相違を語用論的な制約、名詞述語・のだ文におけるコピュラのふるまい、他の終助詞との関係という観点から考察した。最後に、本稿から示唆される発展的な課題を挙げる。

まず、本稿が行った終助詞ヨの対照記述を、他方言においても試みることがある。ヨは比較的広い地域に分布するが、その意味・用法についての記述はあまりなされていない。富山市方言のヨのように、共通語と同義でありながら具体的な用法が異なるということが他方言でも観察されるのか、だとすればその相違はどう説明できるのか、あるいは、ヨ自体が担う意味に相違が見いだせる方言もあるのか、といったことが検討されることになる。

また、本稿では、富山市方言と共通語とで、名詞述語・のだ文におけるコピュラのふるまいの相違がヨのふるまいを規定していることを見た。白岩広行・平塚雄亮（2009）は、名詞述語・のだ文の非過去断定形においてコピュラを伴わない形が西日本に多いことを指摘し、「アノ人私ノ先生ゼ（先生だよ）」（愛媛県宇和島市方言）のような名詞に直接付く終助詞が西日本（特に

中四国以西)で発達していることを示唆した。本稿では、富山市方言のヨには名詞・ガに直接付く場合と、ダ(さらに終助詞)を伴う場合があることを見たが、こうした接続をする終助詞はヨしかない。名詞述語・のだ文におけるコピュラの有無と終助詞との関係については、共通語も含めて記述・対照の余地がある。

さらにそれらの延長上に、各方言における終助詞の体系記述と、その方言間対照がある。幸い、富山市方言の終助詞については、井上優による富山県井波方言を対象とした一連の成果を適用でき、終助詞の体系的・総合的な記述が可能な段階にある。

- 注
- 1 用例の適格性判断において、無印は適格・適切なこと、*は不適格・不適切なこと、??、?は容認しにくい、または、判断がゆれることを表す(??は?より容認しにくい)。*や??、?は、形態・統語的に不適格な場合と文脈上不適切・不自然な場合とを区別せずに付し、本文でその相違を説明する。
 - 2 筆者は1973年生まれ・女性。18歳まで富山市田畑、以後は富山県外に居住。もう一人は1945年生まれの男性。2歳以降本稿執筆時まで富山市浜黒崎および田畑に居住。
 - 3 富山市方言にはいわゆるガ行鼻濁音があり、準体助詞もカ^oだが、本稿ではガ行破裂子音と区別せずに「ガ」等と表記する。また、コピュラにはヤもあるが、ダで代表する。
 - 4 「書ク」「書イタ」「書カン(書かない)」「高イ」「子供(ダ)」「子供ダツタ」など、テンスの対立があり、ムードにおいて無標(非推量)の形を「断定形」とする。非過去の名詞述語・のだ文においてはコピュラを付加する形・付加しない形両方を含め、両者の相違についてはその都度記述する。
 - 5 共通語では疑問文でのヨが一般的ではないので、各例aに対応する共通語訳のみ記す。
 - 6 疑問語疑問の反語文では非のだ形とのだ形の対立が中和する。共通語でも同様だろう。
 - 7 白川博之(1993)は疑念表明の場合も「かよ」には「下品さ」が伴うが、それは「聞き手の意識に直接作用する段階まで踏み込む」ことから説明できるとする。

- 8 (C)の終助詞としてワイ・ガイ, (D)の終助詞としてワイ・ガイ・ワイネも可能なようにも思われるが, 話者2名とも判断に迷う。
- 9 終助詞チャ等, 共通語に対応する語がない場合, a・bまとめて共通語訳を示す。
- 10 井上の論は富山県砺波地方井波方言を対象としているが, 富山市方言にも適用できる。
- 11 共通語でもヨ↑↓は〈問題提起+対処をせまる〉意を表すと思われる。書き言葉では「よう」と表記されがちである。ただし, 共通語では, 子どもが大人に対して甘えた態度で接するような場合が思い浮かびやすく, 自分では対処できないことを聞き手に懇願するという意味合いを帯びる(三井はるみ氏の教示による)。富山市方言と共通語とで「上昇+下降」という音調が担う意味は共通するが, その語用論的・待遇的な適用のされかたに差があると言える。
- 12 井上優(1995b, 2006b)による。マは下降調(低く付いて平ら), ヤは下降調(同前)か上昇調。井上優(2006b)は, マにも上昇調があるとするが, 富山市方言では許容しにくい。
- 13 井上優(私的談話)によると井波方言では「断定形+チャ+ヨ↓」が用いられない。終助詞の体系におけるヨ↓の位置づけが, 富山県内の方言間で異なる可能性がある。

引用文献

- 井上優(1995a)「富山県砺波方言の終助詞「ゼ」の意味分析」『東北大学言語学論集』5, 11-21.
- 井上優(1995b)「方言終助詞の意味分析—富山県砺波方言の「ヤ/マ」「チャ/ワ」—」『国立国語研究所研究報告集』16, 161-184.
- 井上優(1997)「「もしもし、切符を落とされましたよ」—終助詞「よ」を使うことの意味—」『月刊言語』26(2), 62-67.
- 井上優(1998)「富山県砺波方言の終助詞「ジャ」の意味記述」『日本語科学』4, 122-134.
- 井上優(2006a)「富山県井波方言の「ガヤ」について」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平 2 文論編』179-192, 東京:くろしお出版.
- 井上優(2006b)「モダリティ」佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂『シリーズ方言学 2 方言の文法』137-179, 東京:岩波書店.
- 白岩広行・平塚雄亮(2009)「名詞述語に繫辞動詞は必要か—繫辞動詞の

使用頻度に認められる方言差一』『日本語文法学会第10大会発表予稿集』, 日本語文法学会.

白川博之 (1992) 「終助詞「よ」の機能」『日本語教育』7, 36-48.

白川博之 (1993) 「働きかけ」「問いかけ」の文と終助詞「よ」』『広島大学日本語教育学科紀要』3, 7-14.

田窪行則 (2010) 「談話管理の標識について」『日本語の構造—推論と知識管理—』, 東京: くろしお出版.

蓮沼昭子 (1996) 「終助詞「よ」の談話機能」上田功ほか編『小泉保博士古稀記念論文集 言語探究の領域』383-395, 東京: 大学書林.

蓮沼昭子 (1997) 「終助詞「よ」の談話機能 (2)」『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』編集委員会編『日本語教育論文集—小出詞子先生退職記念—』581-599, 東京: 凡人社.

益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』, 東京: くろしお出版.

森山卓郎 (1992) 「疑問型情報受容文をめぐって」『語文』59, 35-44.

付記

本稿はJSPS 科研費 26244024 の助成を受けたものである。

(こにし・いずみ 広島大学准教授)

On the Final Particle *yo* of the Toyama-city Dialect

Konishi, Izumi

This paper describes the usage of the final particle *yo* of the Toyama-city dialect of Japanese (TJ) and compares it with the *yo* of Standard Japanese (SJ). Both TJ and SJ use *yo* in declarative, interrogative, and imperative sentences. Its meaning, common across dialects, is “check this information with other information, and then infer.” In TJ interrogative sentences, dissimilar to SJ, *yo* doesn’t imply blaming the hearer. In TJ declarative sentences, *yo* with a falling intonation directly follows a noun, the nominalizer *ga*, or another final particle. However, *yo* with a rising intonation is used as V-*yo* or N-copula-*yo*, similar to SJ. These features result from the usage of copula and final epistemic particles’ development. Across the aforementioned three types of sentences, the falling *yo*, unlike rising *yo*, is not paradigmatically contrastive with other final particles.